

2019年11月10日（日）「そこに居ると言うことが」

申命記 31:11-13

11 イスラエルのすべての人々が、主の選ぶ場所で、あなたの神、主の御顔を拝するために来るとき、あなたは、イスラエルのすべての人々の前で、このみおしえを読んで聞かせなければならない。12 民を、男も、女も、子どもも、あなたの町囲みの中にいる在留異国人も、集めなさい。彼らがこれを聞いて学び、あなたがたの神、主を恐れ、このみおしえのすべてのことばを守り行うためである。13 これを知らない彼らの子どもたちもこれを聞き、あなたがたが、ヨルダンを渡って、所有しようとしている地で、彼らが生きるかぎり、あなたがたの神、主を恐れることを学ばなければならない。」

### 【序論】

今日は「子ども祝福礼拝」として、礼拝の中で子どもたちの祝福を祈らせていただきました。「子ども」と言いましても、もう大人の仲間入りをしているような青年も含まれます。この教会にも乳幼児が多かった時期がありますが、5年、10年経ちますと、驚くほど頼もしい存在になります。私がこの10数年の牧師人生において大切にしてきたことは、「家族単位で礼拝を守る」ということです。私たちが神の祝福を受けようとするとき、礼拝に参加する以上にそれを得られる時間はないでしょう。だからこそ、子ども祝福式は礼拝の中で行なわれるのがふさわしく、まさにその時、子どもたちは神と出会っているのです。いえ、神との出会いの中で祝福を受けていると言った方がよいかもしれません。そして、子どもが祝福を受けるとき、家族も祝福を受け、神の家族である教会も祝福を受けるのです。今日はご一緒に「家族」という事柄に思いを巡らせながら、子どもの祝福を考えてまいりましょう。

### 【本論】

#### 本論 1. 申命記 31 章から

今日与えられた聖書の御言葉は申命記 31:11-13 ですが、この箇所はイスラエルの民が老若男女、更には在留異国人までもが揃って神の御前に出ていたことをよく表しています。そもそも、申命記というのは、モーセがその人生の終りに、彼の人生の大半を占めてきた出エジプトと40年の荒野の放浪の旅を回顧し、これからいよいよヨルダン川

を渡ってカナンを占領しようとしている民に向けて語った告別説教とすることができます。かつてシナイ山で神が民に与えてくださった律法を整理し、契約の更新をする必要があったのです。なぜなら、この40年の間にほとんどの民は死に絶え、ここに残されているのは、旅の間に生まれた「第二世代」の人々だからです。彼らにはエジプト脱出の経験もなく、律法を直接受け取ったこともありません。言わば「経験に基づかない信仰」に立っている人々に、モーセはどことなく不安を感じていたのでしょう。だからこそモーセは、過去に神がなされた御業と、民に語られた教えとを彼らの心に焼き付けて世を去らなくてはなりません。そうでなければ、カナンの地に入ってしまったときに、民が瞬く間に墮落してしまうことを予想したからです。申命記は大きく分けて3つの説教から成り立っていますが、31章は次のリーダーとなるヨシュアの任命の場面となります。

私たちの教会でもそうですが、牧師就任式というのは礼拝の場で行なわれるものであって、それは厳粛な儀式です。ヨシュアもまた一つの「礼拝」において、神と人との前で任命され、按手を受けました（民数 27:18-23）。ですから、そこに居合わせるすべての人がこの重大な出来事の証人であり、ヨシュアを認め、彼をお立てになった神に従う意志を確認する時であります。その時の構成メンバーが重要なのです。

12節を読むと、この就任式に集っているメンバーは「**男も、女も、子どもも、あなたの町囲みの中にいる在留異国人も**」であったことが分かります。特に「**子ども**」に注目してみると、ここで使われている「**タフ**」という単語は「子どもたち」「小さな子どもたち」「小さい者たち」という意味であって、幼児や乳児も含まれていることが容易に想像できるでしょう。つまり、子どももれっきとした「礼拝者」であり、当然のように神の民の構成員をなしているのです。後ほど見ていきますが、イスラエルの歴史のあらゆる重大な局面で、子どもが居合わせているということをまず強調したい。

もう一点ふれておきますと、「**在留異国人**」という人々も登場しますが、この人々が信仰をもっていたのかどうかは分かりません。ただ奴隷として雇われていた外国人なのかもしれない。それでも彼らは神の民の礼拝に招かれている。つまり、祝福を受けるべき者としてそこにいるのです。礼拝というのは、信仰をもっている人々によってささげられるものでありますが（信仰がないと礼拝にはならない）、その祝福の場は外に向けて開かれており、まだ信仰をもっていない人々も神の恵みにあずかることができるよう願われ、招かれているのです。説教というのは「イスラエルよ、聞け」ということばにも表されているように、神の民に対するメッセージとして語られているものでありながら、同時に信仰をもっていない人々にも「この祝福に入りませんか」「私たちの輪に加わりませんか」と呼びかけているものであります。

## 本論 2. 旧約イスラエルの事例

旧約イスラエルにおいて、子どもが礼拝の場に居合わせていたという事実は、多くの箇所から知ることができます<sup>1</sup>。

- ・ 創世記 4 章ではカインとアベルの兄弟が登場し、そろって神にささげものをしています。これは家族での礼拝の形態を部分的に表しています。(創世記 4:3-5)
- ・ セツにエノシュという息子が生まれたとき、人々は主の御名によって祈ることを始めたと言われていました(創世記 4:26)。これは公的な礼拝を指しているでしょう。
- ・ 大洪水を経験したノアは、箱舟から出てきたときに礼拝をささげました(創世記 8:20)。明確には書かれていないものの、この礼拝は家族そろってのものだったことでしょう。
- ・ モーセがエジプト王に、主を礼拝するためにイスラエルをエジプトから解放するよう要求したとき、彼は「若い者や年寄り」「息子や娘」も行かせるよう求めました。それに対してパロは「幼子まで行くのはおかしい」と反論しますが、モーセは礼拝に子どもが参加することを当然として語っています。(出 10:8-10)
- ・ 礼拝の場所が指定される箇所において、神は民に家族でそこに集うことを求めておられます。そして、具体的に「息子、娘」という言葉が付け加えられる。(申命記 12:5-12)
- ・ イスラエルの三大祭においても、参加者は家族全員であることが分かります。(申命記 16:11)
- ・ ヨシュアも会衆を集めて律法の書を読み上げましたが、その中には「女と子どもたち」「在留異国人」が含まれていました。(ヨシュア 8:34-35)
- ・ ヨシャパテの時代、モアブ人とアモン人の連合軍が攻めてきて、ユダ王国が存亡の危機に直面したとき、助けを求める礼拝に参列していた人々の中には子どもたちもいました。(Ⅱ歴代 20:13)
- ・ 預言者ヨエルの時代、いなごの大群による審きが迫っていたとき、「きよめの集会」を開いて悔い改めることが求められた中には、やはり「老人」「幼子、乳飲み子」が含まれていました。(ヨエル 2:15-16)
- ・ 捕囚後、エズラの時代に起きたリバイバルの時にも、「イスラエルのうちから男や女や子どもの大集団」がエズラの許に集まってきたと書かれています(エズラ 10:1)。ここで使われている「子ども」(イエレド)という言葉は、「胎児」から「少年少女」までを表す幅広い意味をもっています。

<sup>1</sup> 鞭木由行『子どもも一緒に礼拝』いのちのことば社、2012、pp.113-122

- ・ エズラと同時代のネヘミヤの記録にも、律法の書の朗読のときに集まっていた人々の中には「聞いて理解できる人たち」（おそらく子ども）が含まれていたと書かれています。（ネヘミヤ 8:2-3）

多くの事例を紹介しましたが、旧約イスラエルにおいて子どもたちは「契約の民」の一員として見なされていたのであり、そこに居るのが当たり前の存在でした。神との契約は、民のリーダーとだけではなく、女性とも子どもとも結ばれたのです。生後8日目に男子が受ける割礼は、契約共同体の一人となったことのしるしであり、その後家族で、民全体で礼拝をささげるのが当然のことだったのです。

### 本論3. そこに居るといことが

私は教会に集う子どもたちのための個人的な学びの時間をもっておりますが、これは信仰成長のための知的教育であり、もちろん大切なものです。しかし、この「学び」を「礼拝」に置き換えることはできません。「学び」が机上の学習であるのに対し、「礼拝」は生きた交わりの中で経験していくものです。その交わりは、第一に神との交わりであり、第二に聖徒の交わりです。礼拝を通してでなくては、私たちは真に神を知ることができないのです。

私が礼拝に出席するようになったのは、たしか小学生になったときからでした。最初は讃美歌や聖書の開き方も分からず、姉にめくってもらいながらその場に居合わせていました。当時の私にとって、この礼拝に参加することはあまり楽しいことではありませんでした。まず、説教が難しい。知らない用語が次から次へと出てくるものですから、1時間その話を聞くのは大変なことでした。今になって振り返りますと、子どもにも分かる内容を話してほしかったという思いと、御言葉の真理を宣べ伝えるのに一切妥協がなかったことへの尊敬の両面があります。現在、自分が説教者になってみますと、どうしても専門用語を使わざるをえない状況が出てきてしまうのです。会衆の皆様の反応やご意見をいただきながら、どうしたらそれが分かるように伝えられるか、模索しながらの説教者人生を送っています。

いずれにしましても、礼拝の場に幼いときから居られたということ自体が祝福だったのだと、今になってよく分かるのです。できることなら、小学生に上がる前からそうしておくべきだったと思います。数年間母子室で過ごしてしまいますと、そこから出てくるのに既にハードルができてしまっているからです。たとえ全部分からなかったとしても、そこに居るといことが重要なのです。

私が神学校で教わったP先生の教会に、いつも礼拝に来ては寝ているだけの人がいた

そうです。おそらく、日々の労働で疲れきっていたのでしょう。ある日曜日にも、彼はボロボロの服で、髪の毛もボサボサの状態で礼拝に来て、案の定説教中に寝始めたそうです。その日の説教者は外部からお招きした先生だったそうで、彼のいびきがあまりに大きくて失礼になると感じたP先生は、彼を起こしに行こうとしました。ところが、P先生の横に座っていた奥様が止めて「そのままにしてあげて」と言ったそうです。彼は説教中最後まで眠り続けていました。そして、その翌朝、彼が天に召されたという連絡が入ったそうです。そのときP先生と奥様は、こう語り合ったそうです。「彼はあの眠りの中で既にイエス様の祝福の中にいたんだね。説教を聞くだけが礼拝なのではなく、そこに居るということ自体が彼にとって重要なことだったんだね」と。

### 【結論】

私自身も、できる限り子どもにも伝わる内容で御言葉を取り次ぎたいと思っておりますが、十分にはできていないかもしれません。そんな自分を慰めるわけではありませんが、子どもたちがここに座ってくれているということが、何よりも嬉しいことなのです。この礼拝に参加してくれている、そのこと自体が神様の祝福の許にいるということなのです。子どもだけではありません。老若男女、そして、まだ信仰に至っておられない方も、この祝福の場所に來続けていただきたいと思えます。礼拝を続けていくと神が分かるようになる（礼拝から離れると神が分からなくなる）。自分の人生が確かに祝福されていることを知るようになるからです。

### 【祈り】

私たちの父であられる神よ。今日もこの礼拝に私たちを招いてくださったことを感謝いたします。長く信仰生活を続けてきた者も、幼い子どもも、一同に会してこの礼拝をおささげしています。その様子を喜んでくださるあなたの御顔を拝します。私たちがこれからも神の家族として共に歩み続けることができますように。家族は喜びも悲しみも共有します。誰かが苦しめば、共同体全体が共に痛みます。誰かが欠ければ、喪失感を覚えます。主よ、この群に連なる一人一人を覚えていてください。とりわけ、今日は集まっている子どもたちを豊かに祝福してくださいますように。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、

旧約より、イスラエルを「神の家族」とし、礼拝共同体となし給うた、父なる神の愛。老若男女、そして在留異国人にも、ご自身のからだに属することを求め給う、主イエス・キリストの恵み。

礼拝を通して神との生きた交わりにあずからせ給う、聖霊の親しき交わりが、我ら一同と共に、とこしえにあらんことを。